



TITLE:

[紹介] 歴史劇「海瑞罷官」をめぐる 學術政治論争

AUTHOR(S):

松村, 昂

CITATION:

松村, 昂. [紹介] 歴史劇「海瑞罷官」をめぐる學術政治論争. 中國文學報
1966, 21: 163-184

ISSUE DATE:

1966-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177264>

RIGHT:

紹介

歴史劇「海瑞罷官」をめぐる學術政治論争

はじめに

昨一九六五年十一月三〇日、「人民日報」編輯部は毛澤東の「百花齊放、百家爭鳴」の方針に沿いつつ、姚文元の「評新編歷史劇『海瑞罷官』」なる批判論文を上海の「文匯報」から轉載し、「歷史人物と歷史劇をどのように扱うか、どのような觀點にたつて歷史を研究し、藝術の方法によつて歷史人物と歷史事件をどのように映し出すか」の問題について、讀者に討論參加を呼びかけた。

「海瑞罷官」の作者吳晗（一九〇九年生）は歷史學者として、明・清の社會經濟史をはじめ、あらゆる時代と分野にわたる精力的な研究活動を續けてきただけでなく、政治家としても、六五年末當時は、北京市副市長、中國民主同盟副主席の要職にあつた。

紹介

劇の主人公海瑞は明末の政治家（一五一四—一八七、正徳九—萬曆一五）、いわゆる「清官」として有名な人である^④。その有名さは、我々日本人の中での水戸黃門とあい似ると言えるだろう。

海瑞にたいする一連の著述をふまえて、吳晗が新たに九幕の京劇に編んだのが「海瑞罷官」であり、一九六一年一月の「北京文藝」誌上に發表されるや、ただちに北京京劇團によつて上演された。

典型的な封建時代人を、學術論文の中で再評價し、舊劇の中で形象化する地盤、そしてそれを受けいれる地盤が、社會主義建設の盛んな現代中國にもなお残されているのだろうかという疑問が、吳晗の「海瑞罷官」と二三の論文を垣間みた段階での、私の抱いた率直な感想であり、思想的にも形式的にも、人民の立場という觀點からすればけつして高くはない作品を、五年後の今日になつて、ようやく批判の俎上にあげたのはなぜだろうかという疑問が、姚文元以後、毎日のように發表されはじめた批判・反批判の諸論文を讀んだ六五年段階での感想であつた。そして、これは

あくまで學術論争であり、政治的には、海瑞が、吳晗みずから述べるように、「人民大衆に、かれら（右翼日和見主義者）の右翼日和見主義の本來の面目を認識させる」^⑧ために形象化されたものであるならば（事實、私は額面どおりに受けとつていたのであるが）、大した問題にはなるまいというのが、私が論争のさきゆきに對してもつた、いつわらぬ豫想であつた。

ところが、それ以後ほぼ九ヶ月の間に、吳晗とその諸作品についての批判・反批判の論文、文獻、討議資料は百篇をこえるにいたつた。この間、海瑞が民間傳誦の形で民衆の腦裡になお存在しているということと、「海瑞罷官」が歴史劇であるがゆえにもつ社會的教育的作用を反映してか、論争は、ただに學術の分野にかぎらず、政治の分野にまで大きく踏みこんでいつた。批判の對象も、一個の「海瑞罷官」から吳晗の全作品、そして吳晗その人にまで及び、さらに輪をひろげて、吳晗を含む一つのグループ、「反黨反社會主義者」にまで及んでいつた。要するに、「ここ三年いろいろの社會主義文化大革命」^⑨の最終段階における先鋒を

つとめたのが、姚文元の「海瑞罷官」批判であつたということが出来る。

今回の社會主義文化大革命においても、これまでの諸々の革命事業と同じく、その基盤にあるのは、大衆と大衆討議であつた。新聞・雑誌・ラジオ等の報道機關に載せられた、「海瑞罷官」に關する數多の記事は、ニュースというより討議資料という性格のほうが強かつたと思われる。大衆は討議資料の文章をおのれの生活の鏡に照らしながら、工場・人民公社・部隊・學校等の、あらゆるグループの中で、討議をくりひろげるのである。したがつて、「海瑞罷官」問題を、ことさらに學術とか文學の分野に限つて論ずることは、それがいまなお進行しつつある社會主義文化大革命の中で果した役割を見誤ることにならう。というより、學術は、現實の政治の正しい息吹きを吸うか否かによつて、その生死が決定されるのであり、文學も、大衆の現實生活の正しい息吹きを吸うか否かによつて、その生死が決定されるのだということを、したがつて、學術にしろ文學にしろ、現實の政治や現實の生活の基本を落しては、何らの成

果をもたらしえないばかりか、その逆の場合ですら起りうることを、中國の今回の文化大革命は訴えているかのようである。好むと好まざるにかかわらず、中國の種々の動きを紹介するにあたつては、最低この點をふまえてかかる必要がある。

一、「海瑞罷官」のあらすじ

とき、一五六九年（隆慶三）清明節（四月初旬）から同年秋まで。

ところ、江蘇省松江府華亭縣と蘇州府。

人物、巡檢使海瑞、母謝氏、妻王氏、召使い海朋。元首相で、いまは郷里に歸つてゐる徐階、その三男徐英、家僕徐富。徐家の小作人趙玉山、嫁洪阿蘭、孫趙小蘭。華亭縣知事王明友、蘇州府知事鄭儉、吳縣知事蕭岩、松江府知事李平度。その他。

第一幕 人民の憤り

洪阿蘭、趙小蘭母娘が趙玉山の一人息子の新佛を祀りに出る。夫であり父である人は、徐に田地を横領され、財産

紹介

は沒收、なおも年貢納めの督促、お上への告訴は踏みつけ蹴りつけ、ために狂い死んだと唱うところへ、物陰から見ていた徐英が現われ、小蘭を奪い去り、かけつけた趙玉山を打ちのめし失神させる。村人たちは手をこまねいて、「國のおきてはどこにある？ 天のことわりはどこにある？」と、嘆くのみである。蘇つた趙玉山は法廷へと嫁を促す。法廷では、土地を財産を家を、徐の大旦那若旦那から奪いとられたと、こもこも訴える大衆を、知事王明友が追いはらつたあと、洪阿蘭が現われる。知事は洪に人的物的證據がないとして、その場をきりぬける。

第二幕 とり調べ

徐英は府縣知事にそれぞれ賄賂をおくる。審査の場、檢證の役人は趙玉山に打撲傷のあとをみとめずと言い、徐英は當日、高等文官試験の資格をもっている大學生の家で勉強していたと述べ、徐富を證人としてたてる。趙は抗議するが、王明友は逆に彼を鞭うち、殺す。「人の世に是非を辨えるその難しさ、お天道さまよ、お天道さま」と、洪阿蘭の慟哭、徐のせせら笑い。王がいささかたじろぐものと

き、巡檢使着任のしらせが入り、王は慌てて蘇州にとびたつ。

第三幕 赴 任

四人の府縣知事が海瑞の經歷につき、期待と恐慌をこもこも述べて退場。それとは分らぬ平服の海瑞がその家族をつれて登場する。海瑞(唱)「惡しき長老、欲ぶかき役人は、村ざとを踏みにしり、かの苦しき民衆は痛めつけられて村を逃げ出す。民は貧しく財も盡き、國のいのちはいまわのきわ。我は海瑞、みかどの恩に報いて改革につとめん。」

炎天のもと、上訴に急ぐ洪阿蘭や村人たちと海との出會い。村人大勢、「田地はみんな徐のお屋敷にのつとられ、おまけにやれ年貢だ、やれ勤勞奉仕だと、私たちは死ぬほどの苦しみかたでございます。」海、「それもまた、お前たちのまちがいや。なぜに訴えん。」村人甲・乙、「よそのお役人さま、旦那はこの地の方でないから、それも仕方ありません。府知事は、あの有名な剥ぎ屋の李。縣知事はでつかい盜つと役人。私たちがどうして訴えられましよう。(唱)お役所の門は八の字に開いているが、道理が立

つても銭がなけりや入りはできぬ。天上天下はおしなべてお役人の世、なんでまた貧乏人には悪い星のめぐりあわせよ。」海は一瞬絶句する。海瑞の善政を聞き知つてゐる村人たちは、これから蘇州の巡檢使廳に上訴に行くとのこと。「こんどおいでになつた巡檢使の海の旦那さまは、きつと私たちの味方になつてくれますとも。」

太鼓と音楽が海瑞着任を知らせる。集まつた蘇州の村人の一人が警備兵に突きたおされ、姿をやつした海瑞が扶け起そうとするが、彼もまた李平度に突きたおされ、手ひどく罵られたうえ、あぶなく鞭を喰わんとする。

第四幕 徐階との出會い

徐階の屋敷。徐が登場し、二十年間、二代の皇帝に仕え、今は隱居して、廣大な莊園、莫大な財産、萬に及ぶ家僕奴隸を誇る身であることを唱と科白で述べたあと、元の部下海瑞と舊交を溫めうる喜びを獨白し始めるが、子や孫たちの横暴ぶりに、ふと思案が移る。海の來訪が告げられ、形どおりの挨拶のあと、徐の危惧は事實となつて現れる。徐英の一件がもちだされ、もし確かな證據があれば法のいか

なる裁きにも従うと、徐階は海瑞から言質を取られてしまふ。徐階は息子に問いただし、その誘拐毆打と偽證事件が事實と知つて驚き、徐英も海の人となりを知つて驚き、そろつて大いに慌てるが、ふと惡知慧を働かせて、父親が息子に何やら耳打ち、二人の顔に安堵の色が蘇る。

第五幕 母の教え

巡檢使廳の奥座敷。母の謝氏・妻の王氏が、海瑞の事業についての人民の噂を喜びつつ、話を交わすところへ、海瑞が登場する。母のねぎらいを受けた海は、徐階父子の横暴からくる悩みを漏らす。徐階はかつて、おのれを死刑から救つてくれた人。だが、弱年の海瑞にみずから忠孝の道徳を教えてきた謝氏は、「お前は個人の恩を返すのか、それとも國家の掟を敬うのか」とせまる。海も、「個人の恩を顧みて國家の掟を忘るれば、學問を何の役に立てんとするか。國境を守り人民をいたわるために、公明正大をおのが導きとせん。」と唱い、「汚らしい役人どもの頭をばばつさりと切つて見せる。」と決心する。

第六幕 裁き

紹介

海瑞は着任以來、水利等の現地視察や農工商人との辻問答のほかは、門を閉ざして出ない。脛に疵もつ各府縣知事は、針の筵に坐つた思いで、彼との面會を待つ。海は登場するやただちに、退役官僚や金持ち、汚職官吏等の横暴ぶりを糾弾、各府縣知事の惡業を暴露する。主題は洪阿蘭上訴の一件。王明友、徐英の陳述によつて大學生の張が訊問されるが、張は架空の人物で、實は徐富の變裝である。徐英が千字文、百家姓を書いていたという徐富自身の陳述とかような者は在籍せずという教官の證言によつて、徐富の化けの皮は剥がされ、その口から、徐英の婦女誘拐、老人毆打、贈賄、王明友の原告撲殺、等々の真相が暴露される。かくて斷罪は、徐英に絞首刑、王明友に斬殺刑、李平度に禁錮、徐富に鞭打ち百、三年の徒刑。徐英は父親の面子により罪一等を減じてくれるよう請うが、海瑞は、「王事も法を犯せば庶民と同罪。」と言つて、四人を連れ去らせ、洪阿蘭を見やれば、洪は、「青空のごとく翳りなき旦那さまは人民のために恨みをすすいでくださいました。ご一族がとわの代までお榮えあられますように。」と言つて、

叩頭する。海瑞、村人に向つて、「みなの人衆、先日の語りあい、よくぞいろいろ教えてくれたのう。」と言えば、村人の甲、「旦那さまの裁きはまことに正しうございます。

ただ、私たちの土地財産は徐家をはじめお歴々にのつとられ、空つぽの財布に残るは年貢だけ、民のなりわいは苦しみを極めております。おついでにどうかお圖りくださいますよう、旦那さまにお願い申します。」と訴え、乙と丙も、「旦那さまが私たちの味方になつてくれますように。」と懇願する。海はただちに、各退役官僚が横領した良民の土地財産を返還すべきむね、觸れを出させる。村人たちは叩頭し、「旦那さまは人民の味方、江南の貧しい民も今からは樂な日々を過せます。ご恩に感じ徳を戴き、あつしら戻りましては、旦那さまのお姿を畫き、朝な夕なに拜ませていただきます。(そろつて、唱)今日は翳りなき旦那さまにおめえし、これからは野良のかせぎに勤しみ田園をしつかりと整えます。土地があれば衣食に何の愁いがありましようぞ。安らかなりわいが、つい眼の前にあります。」と述べて退場する。海瑞も、「これで民衆も一息つけよう。」

と述べる。

第七幕 命乞い

徐階は海瑞を訪れ、獨り息子の免罪のため、泣きおとすやら恩に着せるやら、はては袖の下を使おうとするが、いっこうに通じない。それではと徐が脅迫に出ると、海は、「徐元老殿、冠はそろここにござる。剥ぎたいのであれば持つて行かれるがよろしかろう。この海瑞は、宮仕えの身である前に、一個の正々堂々たる大丈夫たらんとするわ。お上の仰せが一たびあれば、さつさと官を退いてみせます。」もはやこれまでと、徐は捨てぜりふを残して去る。海は、「百萬の人民のために僅かな善事をしてやることは、やはり、みかどのためにいささかの心配ごとを軽くすることにもなるのだ」と、胸をはる。

第八幕 仇うち

徐階の親友甲と乙が徐家を訪ね、家令と面談するうちに徐階が歸館する。海瑞を處分する計略をあれこれとめぐらすうちに、中央の高官と在郷の退役官僚との内外から夾撃すべしという案に、衆議一決する。ただちに實行に移され、

書信と賄賂が中央に向つて飛ぶ。なかでも目指すは監察官の戴鳳翔である。

第九幕 免 官

巡檢使廳の大廣間で、徐瑛と王明友の死刑がとりおこなわれようとしている。そこへ戴鳳翔・徐階の一行が登場し、戴は、皇帝の命令により海瑞の免官とおのれの着任を、海に告げる。海が、江南の大害とは他ならぬ退役官僚どものこと、「濡れ衣は十分に正さねばならぬ。田を返してはじめて人民を安らげるのだ。」と唱えば、戴は、貴様こそ、百姓を虎狼にしたてお偉方をその餌食にするものだ、やり返す。そのとき、傳令官が執行時間の到來を告げ、押し問答は資格の所在に移るが、なにぶん巡檢使更代と罪人特赦の文書が届かぬ以上、大權はなお海にある。號砲三たび鳴り、徐はぶつ倒れ戴は仰天する。海は大權の佩印を高々と舉げ、新舊の更代を告げる。幕がおり、合唱。「天寒く地凍えてひゆうひゆうと鳴る風、千萬すじの絲もてひかる別離の情、海瑞さまは南に歸りて留めおせず、よろずの家々は生き佛とお香をば焚く。」

紹介

二、主題と教育的意義をめぐつて

論争のきつかけをなした姚文元の批判にしたがえば、こ
うである。つまり、「海瑞罷官」の主題は、吳晗が述べる
ような「封建統治階級の内部闘争」^⑩などではなく、「農民
の運命を決定する一人の英雄」がただ獨りで果す「一大革
命」である。封建制度が動かぬものとしてあり、地主の壓
迫と搾取が依然として存在するにもかかわらず、海瑞のや
りかたにならうだけで、農民の土地と衣食の問題がもの
みごとに解決され、農民は「安らかななりわいが、つい眼
の前にあります。（好光景就在眼前）」（六幕）と喜ぶの
だと、吳晗は讀者と觀衆に訴えるのである。吳晗が「論海
瑞」のなかで、「農民と地主の訴訟事件に對して、彼（海
瑞）は農民の側に立つた。海知縣ないし海都堂は、當時壓
迫され馬鹿にされ濡れ衣を着せられた人々の救いの星であ
つた。彼は廣範な人民の稱讃を受け、偶像崇拜され口々に
ほめたたえられ、死後の葬列は百里以上も續いた。」^⑪「彼が
一生いつどこでも民衆のために思いをめぐらし、人民の

ために利益を圖つたことを、我々は認めほめたたえる。」と述べているように、この劇に寫しだされた主人公こそ吳晗の理想の人物なのであり、それは單に明代の貧苦にあえぐ農民の「救いの星」であるばかりでなく、社會主義時代の中國人民とその指導者の模範でもある。農民はただ、消極的にも、海瑞に冤罪を訴え、「旦那さまがあつしらの味方になつてくれますように。(大老爺與我等作主)」(六幕)といつて懇願するにすぎない。姚文元が指摘した、以上のような點に、その後の數多の批判論文の基調もあつたといつてよい。

主題についてもうすこし分析すると、吳晗は、この劇の初稿から七稿に進む過程で、當初は「退田」、横領した土地を返させることを主とし、「除霸」、惡德ボスを退治することを従としたのであるが、「退田」は改良主義にすぎず、明代當時の農民問題を何ら解決するものではないという友人の指摘を認め、逆に「除霸」を主とし「退田」を従に落ちつけた。^⑬ 吳晗のこのような配慮にもかかわらず、その主題はあくまで「退田」にあると姚文元は主張するが、劇の

主題を「退田」と、「除霸」あるいは「平冤獄」つまり冤罪を正すこととのどちらにとるかは、六五年段階での論争では大した問題にされず、批判の矛先は、いずれにしろ改良主義であるという方向にむいた。

いっぽう、反批判に屬する意見として、例えば、封建社會では「清官」「好官」が改良主義の措置をとつても農民問題は解決できず、官僚地主集團の反對にあつて破産してしまう、つまり改良主義失敗譚であるという意見(郭非)^⑭、農民がおのが幸福を地主に乞うて得られなかつた話でありおのが幸福はおのが力によつてのみ、壓迫された人民みずからが鬭争に立ちあがることによつてのみ得られることを教えた鬭争回避教戒譚であるという意見(何正祥、離先瑜)^⑮、後述の道德繼承論と關聯するが、海瑞のごとき封建國家への「忠」を、プロレタリア階級の黨への、人民への、革命への、社會主義建設事業への「忠」におきかえるべきだとする意見(郭非)^⑯、また、徐階一派に對する海瑞の、「正義を唱え、不撓不屈の、貪汚に反對する、暴徒を除き良民を安んずる、公平無私のあの精神」を、帝國主義と現代修正

主義の反中國大合唱に對する中國人民の精神に對比しようとする意見（宋都^⑮）なども出たが、前二者は主人公海瑞の積極性をないがしろにしているだけに、一の教訓としてはうなずけるとしても主題とはいえず、最後者は、吳晗の、次に述べるような政治的意圖が具體的にあばかれるにつれて、説得力のうすいものとなつた。

すなわち六五年一二月二七日の吳晗の自己批判^⑯とほぼ同時に發表された方求の『海瑞罷官』代表一種甚麼社會思潮？^⑰、自己批判に對する批判である史紹賓の「評『關於海瑞罷官』的自我批評」的幾個問題^⑱、そして吳晗の全思想を洗いざらい批判した王正萍、丁偉志等の「吳晗同志反黨反社會主義反馬克思主義的政治思想和學術觀點」^⑲などの論文のなかで、吳晗の劇作の意圖が、一九五九年八月九月の廬山會議（中國共產黨第八期中央委員會第八回全體會議）での右翼日和見主義者（國防部長彭德懷、總參謀長黃克誠、外交部副部長張聞天ら）の解任事件と密接に關連するものとして、しだいに明らかにされるにつれて、「海瑞罷官」の主題も「退田」や「除霸」「平冤獄」等ではなく、

紹介

「罷官」そのものであると指摘された。したがつて、劇の泰幕の合唱、「天寒く地凍えてひゆうひゆうと鳴る風、千萬すじの絲もてひかる別離の情、海瑞さまは南に歸りて留めおせず、よろずの家々は生き佛としてお香をば焚く。（天寒地凍風蕭蕭、去思牽心千萬條、海父南歸留不住、萬家生佛把香燒」が、新たにクローズアップされ、これは、一人の「官」を「免」ぜられた、あたかも人民の味方であるふりをした反黨反人民の「英雄」に對して、遙かな尊敬と限りない戀慕を表現したものにほかならないというのである。

主題と教訓についての以上のような捉えかた——「退田」、「除霸」、「平冤獄」、忠などの封建道德を繼承する問題、「罷官」——のなかに、今回の學術的政治的論争のすべての基本點がそなわつているといつてよい。

三、歴史人物の評價と歴史劇をめぐつて

マルクス・レーニン主義の國家觀においては、國家は階級闘争の手段であり、一の階級が他の階級を壓迫する機關

である。したがつて、封建制國家は、地主階級が農民階級に對して獨裁政治をしく手段である。同様に、その法律、法廷、官吏も、やはり地主階級の獨裁政治の手段であつて、農民階級のものでなければ、超階級的なものでもない。

このような觀點にたつことから、次のような指摘が生まれる。すなわち、いわゆる「清官」が、いかに清くあろうとも、結局のところは「貪官」と同じく、統治階級の手段の一つであることに變りない。彼らが清いというのは、「政治的には、皇帝に、朝廷に、封建的な法律制度に忠實であり、思想的には、封建道徳を遵守し、經濟的には、合法的な搾取の範圍外では不當な財物を全然貪らないか少ししか貪らない。」^⑧ということを意味するにすぎないのである、と。

明末という時期は、一部の大地主の大地所有がますます進み、一方で農民叛亂が頻發した時代であるが、このような狀況にあつて「清官」「海瑞は、「退田」、大地主所有の進行を制限することによつて、「貪官」たち統治階級の右派と抗爭しつつも、「除霸」、惡徳ボスどもの横暴を除き、「平冤獄」、訴訟を公正に裁くことによつて、農民の反抗

氣分を緩和しようとした。その最終的な狙いは何かといえ、中小地主や富農を經濟的に保障することによつて、本來の封建的地主支配をより鞏固なものとし、王朝の財政をたてなおし、農民の反抗的感情を和らげることともあわせて、王朝政權をより鞏固なものにすることであつた。したがつて、吳晗が海瑞をはつきりと統治階級に位置づけ、そのもとで「退田」「除霸」「平冤獄」といつたテーマを展開させるかぎりにおいて、「海瑞罷官」に表わされたものを、「封建統治階級の内部鬭爭」^⑩だとするのは正しいはずであつた。

ところが「海瑞罷官」において、吳晗は海瑞をはつきりと農民の側に立たせ、この「清官」は地主階級の獨裁政治の手段として農民に敵對するのではなくして、農民階級の利益のために奉仕するのだと主張した。「退田」「除霸」「平冤獄」といつた、地主階級の内部に起つた、社會的歴史的には副次的な矛盾を、地主と農民の間の、社會的歴史的に最も主要な矛盾にすりかえてしまつたわけである。批判論文としても、水利事業とか租税の減免とか公平な裁判

などのように、「清官」が同じ階級である「貪官」の利益を侵し、結果的には農民に有利な政治をおこなうこともあるということを否定するわけではないが、吳晗が海瑞を不當に美化し、逆に農民を不當に無力化するなかで、このような事實を、最も主要な階級矛盾に本質的にかかわる典型的なキヤラクターとして前面に押し出したところに誤まりをみとめたのであり、いいかえれば、海瑞が歴史事實としてもつ飴と鞭の二面政策のうち、飴だけを不當に評價し強調することによつて、「清官」が統治階級の永遠の支配を維持し強化するために果たした基本的な役割を、全部あるいは大部分落してしまつたところに、批判の目を向けたのである。

「國のおきてはどこにある？ 天のことわりはどこにある？（王法何在？ 天理何在？）（一幕）」、「人の世に是非を辨えるその難しさ、お天道さまよ、お天道さま／（人間難把是非辨、天哪天／）（二幕）」と嘆息し、「旦那さまが私たちの味方になつてくれますように。」（六幕）」と嘆願するまでに無力化された農民にも、「王法」が「道理が立つ

ても銭がなけりや入りはできぬ。天上天下はおしなべてお役人の世（有理無銭莫進來、上下都是官世界）」（三幕）であることを見抜く眼がなお残っているのに、一たび海瑞が登場して、「王子も法を犯せば庶民と同罪。（王子犯法、與庶人同罪）」（六幕）」と語ることによつて、階級の本質に觸れた農民のことをば蔽いかくしてしまうばかりか、ただ海瑞のごとき「清官」が實際行動として「王法」による正しい處理をしさえすれば、農民はたちまちにしてその冤罪をすぎ、土地をとりもどせるということになるのである。吳晗がこのように「清官」海瑞を不當に美化し、農民を不當に無力化したということは、詮じつめれば、「歴史を推進させる動力が階級闘争ではなく「清官」であるということ、人民大衆はみずから起ちあがつてみずからを解放する必要はなく、ただ一人の「清官」の恩恵を待ちのぞみさえすれば、たちどころに『樂な日々（好日子）』（六幕）を得ることができるといふことを主張することであり、壓迫された人民は革命を必要とせず、いかなる厳しい闘争を経る必要もなく、舊社會の國家機構をうち砕く必要もなく、た

だ「清官」にむかつて平身低頭し、封建王朝の『王法』を遵守しさえすれば、汚職官吏を一掃することができ、『安らかななりわい』（六幕）をものにすることができるといふことを吹聴することである。」（姚文元^③）ちなみに吳晗の歴史理論に對して「彼は、歴史は帝王將相が創造したものであつて労働人民が創造したものではないと主張し」（王子野^②）、「マルクス・レーニン主義の批判の原則を放棄し、極力古人をほめたたえ、歴史人物の限界性を批判することに反對し、歴史遺産と歴史人物に對して全面的な肯定の姿勢をとる。」（武英平^④）といった批判が出てくるのは、單に「海瑞罷官」だけからの歸結ではなくして、彼の歴史に關するすべての著作からのそれである。事實、吳晗が歴史上の人物に注ぐ眼は、隋末の農民叛亂の領袖である竇建德^⑤（五七三—六二二）に對してよりも、魏の武帝曹操^⑥（一五五—二三〇）、唐の則天武皇^⑦（六二三—七〇五）、明の太祖朱元璋^⑧（一三二八—九八）、明初の政治家于謙^⑨（一三九四—一四五七）のごとき「帝王將相」、北宋の包拯（九九一—一〇六二）、明の况鐘（一三八三—一四四二）、周忱（一

三八—一四五三）、そして海瑞のごとき「清官」などに對しての方が壓倒的に多く、しかもその評價はきわめて肯定的である。

吳晗の歴史觀と、とりわけ「海瑞罷官」に對するこのやうな批判に對して、姚全興などの少數の反批判論文は、一部の「帝王將相」ないしは「清官」を評價する場合に、「封建主義の人民性」を認め、かれらが自己の階級の利益をそこなわないという前提に立つているとはいえ、やはり肯定すべきものであると説き、海瑞もこのような「封建主義の人民性」を有つていたからこそ、生命の危険を冒してまで暴政に反對し、ために免職になつたのであつて、彼の事業は確かに人民に一定の物質生活上の條件を與え、當時の人民の願ひにかない、客觀的にも社會の生産の發展に寄與しえたと、主張する。この場合、姚全興が「封建主義の人民性」の代表例として擧げるのが杜甫である。朱熙も、「自分は一人の江南人であるが、自分の知るかぎりでは、廣範な労働人民のなかで李白や杜甫を知らない人は多くあつても海瑞を知らない人は僅かである。」と言つてゐる。

いわば、大衆の中に近松を知らない者はいても水戸黄門を知らない者はいない、というのに近い言いかたである。ただここで私見をさしはさむならば、前者については、人民の日常的な衣食住の問題に直接にあずかるものとそうでないものということをも含めて、海瑞と杜甫との「人民性」の同質性（あるいはその異質性）を、より明確に分析する必要があるうし、後者については、傳統文學の高踏性を示す例でこそあれ、海瑞の「人民性」をひきだす例としては不充分であると思われる。

さて、吳晗にはまた歴史劇に關する一連の發言があるが、そこで彼は、歴史人物に關する劇を、「歴史劇」、「故事劇」、「神話劇」に分け、歴史劇の人物の「典型的なキャラクターと典型的な環境は歴史事實に符合す」べきであるとか、「歴史劇は、それが歴史的眞實にかなり符合するようにしなければならず、ねじまげとあてずっぽうは許されない」と述べて、歴史劇における歴史的眞實性を強調し、藝術的眞實は、歴史的眞實が約束された範圍でのみ驅使されることを許している。ある種の人物や事件は、たとえ史料に存

在しなかつたとしても、「典型的な環境にもとづいて許された場合に、これらの人物や事件も歴史的な根拠がある」のである。吳晗のこのような歴史劇理論そのものについての直接の批判は生じないが、「海瑞罷官」のように歴史的人物を具體的に形象化する過程で批判が生じてくる。というのは、歴史創造の主體は何かという、先に觸れた問題と深くかわりあうことであるが、歴史的眞實の捉えかたに問題があるからである。つまり彼にあつては、史料に記された歴史事實が、價值觀をふまえた歴史的眞實と同一視されている。彼が歴史人物を見る際に、その底にあるのは、「その時その場における基準（當時當地的標準）」であつて、「いまのこの場における基準（今時今地的標準）」ではない。「現代の人々に求める基準でもつて古人をはかることはできぬ。そのようにすれば一人として及第する人物はなく、歴史主義ではない。」したがつて、彼が具體的な形象化の過程で據りどころとするのは、「その時その場における大多數の人々の意見（當時當地大多數人的意見）」である。「海瑞罷官」に「本事」として、明史の海瑞傳、徐階傳、

高拱傳、王宏誨の海忠介公傳、李贄の海瑞傳、談遷の棗林雜俎和集をかぶせたのは、その表われであらう。

史料への全幅の信頼を寄せる吳晗に對して、批判論文は史料検討の必要を説く。海瑞を人民の側に立たせる根據の一つとなつた、明史二二六海瑞傳の、「小民聞當去、號泣載道、家繪像祀之」「小民罷市、喪出江上、白衣冠送者夾岸、酹而哭者、百里不絕」なる文を例にとれば、「小民」とか「白衣冠送者」が事實として「貧農、中農」であつたのかどうか、ひいては、「彼は廣範な人民の稱讃を受け偶像崇拜され口々にほめたたえられ、死後の葬列は百里以上も續いた。」^①ことをただちに歴史事實として認めていいのかどうか、嚴しい分析が必要であるとする。なぜなら、明史のごとき現在に残る史料は、「地主階級の口、封建的な文人の手」(戎笙^②)によつて作られたものであつて、人民大衆によつて作られたものではないからである。比較的大衆的な舊小説、舊劇、ひいては民間傳説においても、「歴史において、人々が海瑞の傳統的な姿を形づくるやり方は、その主なものは、封建地主階級が自己の利益を守りつづけ

るために恣にねじまげて宣傳した結果であり、廣範な人民が麻痺させられ欺かれてきた結果である」(杭文兵)が故に、無批判に史料に依ることは許されないのである。

また、劇中にある李平度とか王明友といった府縣知事が死刑にされたり免職されたりした史實は存在せず、徐拱は死刑になつたのではなく兵隊に送られたのであり、それも徐階の政敵である高拱が派閥争いからやつたのであるが、吳晗としては、歴史事實のこのような書きかえは、藝術的眞實のために許された「典型的な環境にもとづ」く書きかえのつもりであつた。が、批判論文によれば、このような書きかえは、藝術のゆえに許される虚構の限度を踏みこえ、封建制の國家や法の本質をおかす原則的な誤まりであり、「合理的な想像と典型的な概括」^③には何らの關係もなく、吳晗が説いたはずの「ねじまげとあてずっぽう」^④そして「古えを借りて今を諷する」^⑤戒めを、みずから犯したことになるのである。

以上が學術面の主流として、「清官」をめぐる交された論争の概略であるが、順序の上でも量の上でもこれに次

ぐのが封建道德の繼承問題である。吳晗は「海瑞罷官」の解題のなかで、「彼（海瑞）のいくらかの良い品性は、やはり、我々が今日學ぶに値するものである。」と述べるばかりか、「プロレタリア階級は、もし過去の統治階級のある種の優れたものをうまく吸収せず、甚しくは全く退けるならば、ただ古えのプロレタリア階級からうけつぐか、あるいはみずからあてもなく創りだすほかはないであろう。問題は、古えにあつてはプロレタリア階級が全く存在しなかつたということであり、みずからあてもなく創りだすというのも、まずはできないことである。」^④とまで述べる。それを受けて郭非や宋都らの、先に挙げたような意見も出たわけであるが、批判論文は、たとえことばの上で同じく「忠」といつても、封建的な國家、法律、皇帝に「忠」であることと、黨、人民、革命、社會主義建設事業などに「忠」であることとの間には、それぞれそれを支える下部構造、つまり地主階級の農民階級に對する搾取と壓迫の支配する封建社會と、搾取被搾取、壓迫被壓迫そのものを無くした共產社會とが基本的に異なる以上、あい容れがたい一

線が劃されていることを指摘する。「よくぞいろいろ教えてくれたのう。（多謝指教）」（六幕）という海瑞の民主性（よしそれが事實であつたとしても）と、人民民主主義下の民主性との間にも、同様に全く異つた内容がこめられているのである。

四、劇作の意圖と政治批判をめぐつて

「海瑞罷官」が單なる學術論争の具としてでなく、社會主義文化大革命の結着の段階における導火線としての役割になつたのは、吳晗の制作意圖がきわめて政治的な問題をふまえているからであり、姚文元が批判の火蓋を切つた狙いも、最終的にはそこにあつたことが、現在では明らかである。

姚文元が劇中の「退田」を、一九五八年以後の人民公社化に反對し、個人經營を要求する「單干風」に、「平冤獄」を、過去に批判された人々の罪狀をひつくりかえし、逆に高く評價することを要求する「翻案風」に、それぞれ結びつけようとしたとき、姚全興などは、それが歴史的條件を

無視して歴史的な社會事情と現代のそれとを機械的に同一視することから生ずる誤まりであり、このような論法でゆくと、もし李自成の叛亂（明末、飢饉の流民によつて起きた暴動の一つ）を描くとすれば、それは中國人民と共產黨に對して反旗を翻すことになるではないかと、反論した。しかしながら、吳晗がその歴史學研究と歴史劇作法のなかで、「その時その場における基準」を主張する一方、その現實的意義と教育的意義とを強調してきたことも事實である。

「海瑞罷官」がもつ政治的背景については、當初は姚文元と勁松が示唆した程度にとどまるが、六五年十二月末の方求論文によつてきわめて明白な事實の指摘がなされ、新たに田漢の「謝瑶環」⁴³、孟超の「李慧娘」⁴⁴にも、軌を一にするものとして批判の眼が向けられた。この段階で、「罷官」そのものを主題とする見方が新たに浮びあがつてき、劇中で、「濡れ衣は十分に正さねばならぬ、田を返してはじめて人民を安らげるのだ。（冤獄重重要平反、退田才能使民安）」（九幕）と唱い、死をもおそれず「一個の正々

堂々たる大丈夫たらんとするわ。（還要做一个頂天立地的人）」（七幕）と述べる海瑞の顔つきには、「古えを借りて今をそしる」吳晗の顔つきが二重映しになってきたといえよう。

發表の段階では方求の批判と同時期に、吳晗は自己批判を出した。⁴⁵そこで吳晗は、海瑞に對する階級分析の誤まりと、そこからくる歴史人物評價のしかたの誤まりとをまとめ、海瑞の形象化については、「海瑞はまつたところ封建統治階級の立場に立つた官僚」であり、この點は臺本が「強調した」のであるが、その形象のしかたが「あまりに高大」であつたために、「讀者と觀衆に、彼は人民の爲にしたのであると理解させ、したがつて階級の本質や階級的立場を混亂させてしまつた。」と述べ、劇作の目的については、「論海瑞」は「右翼日和見主義に反對する」ためであつたが、それを受けた「海瑞罷官」に對しては當時あいまいであり、「古爲今用」「厚今薄古」の原則がすこしも考えにのぼらず、まつたく古えのための古え、劇作のための劇作であつて、政治を離れ現實を離れていた。」ので

あり、ただこの劇が、たまたま一九六一年の時期とぶつかったことから、劇作の動機と相違して、「良くない人々がこの劇を『單干』や『退田』を要求する聲と関連させたように、良くない効果をもたらししてしまった。」と述べた。

この自己批判後も、主として「清官」論と封建道德繼承問題をめぐって多數の批判と少數の反批判とがひきつづきなされ、例えば「清官」については、「『三本の棒——鐵砲と鎌と筆が擄取階級の手の中にあり、『清官』は彼らの『筆』がはたらいてできたもの』^④であり、『清官』の『清』は人民が評したのではなく、反動的な統治階級が掲げたもの」^⑤であるといった意見や、劇の効果に關して、「一九六一・二年、『海瑞罷官』と『海瑞上疏』が當地で上演された時期に、富農がいたるところで海瑞をもちあげ、例えば、『海瑞がひそかに松江の白雀寺を偵察に行つたとき、わなにかかつたために和尚に捕えられ、大きな鐘の下におさえつけられた。のち白雀寺がひどく破損したので海瑞は救われ、和尚をつかまえて處分した。……わしは今、海瑞と同じで、あの方は鐘の下におさえつけられ、わしは勞働

を監視されている。』といったことを、あからさまに言いふらしていた。」^⑥といった経験が、勞農兵大衆の中からも上つてきた。

しかし、この時期になつて特徴的であるのは、「吳晗が『政治を離れ、現實を離れた』と言うのはまづかなうそであり、彼の行動は一貫して政治的現實的であつた。にもかかわらず、この期に及んで彼は政治問題にするのを極力避け、學術問題に絞ろうと努めている。したがつて、彼の自己批判は自己批判ではなく、自己辯護である。」^⑦という批判である。以後この方向の批判が急速に進み、六六年一月十三日には吳文治が、『右翼日和見主義に反對する』という隠れ蓑でもつて、實際は、右翼日和見主義分子に反黨反社會主義の精神的エネルギーを提供し、彼らが反黨反社會主義の活動を進めるのを激勵したのである。」と述べ、四月十日には、王正萍、丁偉志が、「朱元璋傳」を含む吳晗の全作品に對して全面的な批判をし、そのなかでも、吳晗が兵部尙書于謙は英宗に殺されたが最後は名譽恢復したと述べたところで、わざわざ國防部長という注をつけている

事實を指摘した。續いて四月十三日には、風雷と史紹賢が、吳晗^④が、反人民的として五四年以降にすでに批判された胡適と緊密な交際をもつていたことについて觸れ、さらに四月十八日には、ふたたび王正萍・丁偉志^⑤によつてその解放前の反動的な政治行動がさらけ出され、五月六日には、光明日報編輯部によつて、吳晗の一九四〇年代における「反共反人民反革命」の活動年表が發表された。これら吳晗に對する全面批判の中で、その一味として、「人民日報」元編輯長・北京市黨委員會書記の鄧拓、北京市統一戰線部長の廖沫沙などの名が新たに浮びあがつてき、五月十日に姚文元の第二論文「評『三家村』——『燕山夜話』」「三家村札記」的反動本質」が發表されたのである。

ここ三年来、中國人民は、小説「歐陽海之歌」、現代劇「霓虹灯下的哨兵」、現代京劇「紅灯記」、「沙家濱」、「智取威虎山」、「奇襲白虎團」、バレエ「紅色娘子軍」、交響曲「沙家濱」、塑像「收租院」などを創りだす一方、六四年に楊獻珍の「合二而一」論や邵荃麟の「中間人物」論に對して、そして今回では、文藝における吳晗の「海瑞罷官」

その他をはじめ、田漢（前戲劇家協會主席）の「謝瑤環」、孟超の「李慧娘」、周信芳（上海京劇院長）の「海瑞上疏」、映畫における夏衍（前文化部副部長）の作品、歴史學における翦伯贊（北京大學副校長）や吳・翦が據りどころとした科學院近代史研究所、雜誌「歷史研究」などに對して、鋭い批判を展開してきた。特にこれらの批判は、中國の解放後十六年來續けられてきた思想、文化戰線における階級鬭爭の一環であつて、それ以前の、「一九五一年の映畫『武訓傳』にたいする批判、一九五四年の『紅樓夢研究』にたいする批判と、その後の胡適の反動思想にたいする批判、一九五五年の胡風にたいする批判と、胡風反革命グループにたいする鬭爭、一九五七年の文化戰線におけるブルジョア右派勢力のきちがいじみた攻撃にたいする反擊、一九五九年いろいろの映畫、演劇、文學などの面におけるブルジョア的、修正主義的な文學・藝術の毒草のおびただしい出現にたいする鬭爭^⑥」につながるものであつた。

社會主義文化大革命に關する、中國の最近の論評によれば、生産手段の所有制にあずかる經濟戰線での社會主義革

命だけでは不十分であり、政治と思想戦線での社會主義革命がなお残されているとする。したがって、プロレタリアートは、「人民を毒する舊い思想、舊い文化、舊い風俗、舊い習慣を徹底的にうち破り、とり除いて、廣範な人民大衆のなかに、まったく新たなプロレタリアートの新しい思想、新しい文化、新しい風俗、新しい習慣をつくりだし、形づくつてい」く必要があるのである。しかも、ブルジョアジーの文化革命が、ブルジョアジーを中心とする比較的小数の人々によつてしか展開されないのに反して、「プロレタリアートの文化革命は、廣範な勤勞人民に奉仕するものであり、もつとも多數の勤勞人民の利益に合致する。したがって、この革命は廣範な勤勞人民をひきつけ、結果して、それに参加させることができる。」^⑤のである。ここ九ヶ月ばかりの間にも、中國共產黨中央と毛澤東の指導のもとに、社會主義文化革命に對して廣範な勞働者・農民・兵士や革命的指導者と知識人が参加してきたわけであるが、いまだ七億の人民のかもしれない出ず熱つばさは、少くとも我々日本人には十分に感じられない。しかし、プロレタリアー

トの文化革命が、九五パーセントの中國人民を據りどころとしつつ、思想・文化・風俗・習慣の面において、より廣くより深く進められる以上、長期的かつ激烈な闘争がひきつづきくりひろげられるであろうことは、十分に豫想でき

(一九六六・八・二七)

① 毛澤東「在中國共產黨全國宣傳工作會議上的講話」一九五七・三・一二。

② 「文藝思想論争集」(作家出版社上海編輯所刊。「序言」は一九五八・五・二九附)。「魯迅——中國文化革命的巨人」(上海文藝叢書、上海文藝出版社刊。「結束語」は一九五九・八・一〇附)。「在前進的道路上」(人民文學出版社刊。「前記」は一九六五・四附)などの評論集がある。

③ 「文匯報」一九六五・一一・一〇。「人民日報」一一・三〇。「光明日報」一二・二。「文藝報」第十二期。「歷史研究」第六期。

④ 海瑞に對する吳晗の評價を、「海瑞罷官」の解題から一部紹介しておく。

海瑞、號は剛峰、廣東瓊州(現在の海南島)の人。生活は素朴、性格は剛直かつ耿介、明代の著名な清官、好官。汚職と浪費に反對し、これに嚴罰をもつてのぞむよう主張、清潔で明朗な政治をおこなつた。すなわち、財力の節約を主張し、

政府の定めた制度を嚴格にとりおこなつた。豪強地主を抑えつけ、貧民の力役を軽くする一條鞭法の實施を主張、さらに水利灌漑の普請につとめ、重税を軽くした。また、訴訟の審判を重んじ、冤罪をすすいだ。

彼は汚職官吏や惡辣な在郷退役官僚を非難したが、他方、封建統治階級の忠臣であり、彼のあらゆる政治活動は、封建統治階級の永遠の利益を鞏固にするために出發したものであつた。皇帝を罵り、ために牢獄につながれ、ほとんど殺されそうになつたにもかかわらず、皇帝が死ぬと、こんどは大聲で泣きわめいたのである。

當時の人民は彼を喜びほめたたえた。大官僚、大地主、在郷退役官僚は、彼に反對し、罵り、排斥した。だがごく僅かな、正義感のある官僚と青年インテリゲンチヤは、彼を支持したのである。

⑤ 「海瑞罵皇帝」——「人民日報」一九五九・六・一六。筆名劉勉之。のち「海瑞的故事」に編入。

「論海瑞」——「人民日報」一九五九・九・二。「灯下集」所收。

「海瑞的故事」——中國歷史小叢書、第一版一九五九・一一・一四。

「海瑞」——「新建設」一九六〇第十・十一期合刊。「春天集」所收。邦譯「剛直不屈の官僚・海瑞」（勁草書房「新中國の人間觀」所收。）

⑥ 第七稿解題、一九六〇・一一・一三。北京出版社第一版序、六一・八・八。

⑦ 姚文元以前の批判論文もないわけではない。例えば、星宇「論「清官」」（「人民日報」一九六四・五・二九）、王思治「關於「清官」「好官」討論中的若干問題」（「光明日報」一九六四・七・九）など。

⑧ 「論海瑞」——「灯下集」一六八頁。

⑨ 解放軍報社説「高舉毛澤東思想偉大紅旗、積極參加社會主義文化大革命」——「解放軍報」一九六六・四・一八。「光明日報」四・一九。「文藝報」六六年第五期。「北京周報」五月一〇日號。「人民中國」六月號。

⑩ 「海瑞罷官」解題。「表現されているのは、封建統治階級の内部鬭争、つまり、海瑞を左派とし、徐階一派を右派とする、官僚地主集團の争いである。海瑞は封建統治階級の忠臣ではあつたが、それでも、將來を見通す眼をかなりよくもつており、人民にかなり近より、自己の階級の永遠の利益のために、當時の人民に有利な、いくらかの好ましい事業を實施するよう主張し、在郷退役官僚の不法な擄取を制限し、自己の階級の右派の利益を犯し、激しい争いをくりひろげた。」

⑪ 「論海瑞」——「灯火集」一六五—一六頁。

⑫ 「論海瑞」——「灯火集」一六七頁。

⑬ 「海瑞罷官」序文。

⑭ 郭非「就「海瑞罷官」談「海瑞罷官」——「光明日報」一九六

六・一・一三。

①⑤ 何正祥・離先瑜「替『海瑞罷官』喊冤——評『評新編歷史劇『海瑞罷官』』——『光明日報』一九六六・一・二九。

①⑥ 宋都「不能這樣否定——與姚文元同志商榷」——『光明日報』一九六六・一・一九。

①⑦ 吳晗「關於『海瑞罷官』的自我批評」——『北京日報』一九六五・一二・二七。「光明日報」一二・三〇。

①⑧ 「人民日報」一九六五・一二・二九。「光明日報」一二・三〇。

①⑨ 「光明日報」一九六六・一・九。

②⑩ 「人民日報」一九六六・四・一〇「學術研究」欄第二十七期。「光明日報」四・一〇。

②⑪ 戎笙「歪曲了歷史真實的『海瑞罷官』」——『光明日報』一九六五・一二・二二。——によると、農民反亂は、正德期（一五〇六—一二）に百十餘回、嘉靖期（一五二一—一六六）に百六十餘回、隆慶期（一五六七—七二）に十餘回、萬曆期（一五七三—一六一九）に二十餘回を數えている。

②② 王子野「誰是歷史的主人？」——『光明日報』一九六五・一二・二七。

②③ 武英平「歷史人物的局限性必須批判——評吳晗同志在歷史人物評價問題中的一個錯誤觀點」——『光明日報』一九六五・一二・一七。

②④ 「隋末農民領袖竇建德」——『春天集』所收。邦譯「隋末の

農民指導者・竇建德」（注⑤前掲書所收）

②⑤ 「談曹操」——一九五九・三・一三。「從曹操問題的討論談歷史人物評價問題」。「關於評價歷史人物的一些初步意見」——一九五九・一〇・二七。邦譯「歷史主義と歴史觀——歷史人物の評價問題を論ず」（注⑤前掲書所收）三篇とも「灯火集」所收。

②⑥ 「關於評價歷史人物的一些初步意見」邦譯「歷史主義と歴史觀——歷史人物の評價問題を論ず」（注⑤前掲書）。「談武則天」——『人民文學』一九六〇年七月號。「春天集」所收。

②⑦ 「朱元璋傳」——生活・讀書・新知三聯書店、第一版一九六五・二。

②⑧ 「明代民族英雄于謙」——「新建設」一九六一年第六期。邦譯「明代の民族英雄・于謙」（注⑤前掲書所收）

②⑨ 「況鐘和周忱」——『人民文學』一九六〇年九月號。邦譯「民衆の神様・況鐘と周忱」（注⑤前掲書所收）

③⑩ 姚全興「不能用形而上學代替辯證法——評『評新編歷史劇『海瑞罷官』』——『光明日報』一九六五・一二・一五。

③⑪ 朱熙「甚樣評價『海瑞罷官』——與姚文元同志商榷」——『光明日報』一九六五・一二・二二。

③⑫ 「歷史的真實與藝術的真實」——一九五九・一〇・一六、「灯下集」所收。「談歷史劇」——『文匯報』一九六〇・一二・二五、「春天集」所收。「關於歷史劇的一些問題」——『北京晚報』一九六一・二・一八、未見。「歷史劇是藝術、也是歷

史」——未見。「再談歷史劇」——「文匯報」一九六一・五・三、「春天集」所收。「論歷史劇」——「文學評論」一九六一年第三期、「春天集」所收。

③③ 「談歷史劇」——「春天集」一四五頁。

③④ 「關於歷史劇的一些問題」——戎笙前揭論文注②より引用。

③⑤ 「再談歷史劇」——「春天集」一五五頁。

③⑥ 「關於評價歷史人物的一些初步意見」——一九五九・一〇・一六。「灯下集」一九七頁。

③⑦ 「論歷史人物評價」——「人民日報」一九六二・三・二三。

③⑧ 「論海瑞」——「灯下集」一六五頁。

③⑨ 杭文兵「從『清官』談到『海瑞罷官』」——「光明日報」一九六五・一二・一六。

④① 「論歷史劇」——「春天集」一六一頁。

④② 「再說道德」——「前線」一九六一年第十六期、「學習集」所收、未見。何正祥・離先瑜論文注⑮より引用。

④③ 勁松「歡迎『破門而出』」——「文匯報」一九六五・一二・一五。「文藝報」六五年第二期。

④④ 「劇本」一九六一年第七・八期合刊。單行本、一九六三年東風文藝出版社。

④⑤ 「劇本」同右。單行本、一九六二年上海文藝出版社。

④⑥ 注⑦参照。なお封建道德繼承論については別に、「關於道德討論的自我批評」（「北京日報」一九六六・一・一二）を出しているそうである。

④⑦ 豐臺機務段工人和南宅大隊社員座談紀要「工人農民駁斥吳晗同志的『清官』論」——「光明日報」一九六六・四・一二。

④⑧ 松江縣城東公社部分貧下中農座談紀要「松江縣農民駁斥『海瑞罷官』」——「光明日報」一九六六・四・七。

④⑨ 吳文治「不能用這樣的自我批評回避政治問題」——「光明日報」一九六六・一・一三。

④⑩ 風雷「美化反對人民革命的海瑞居心何在？」——兼評吳晗同志從胡適手裏接下來的反動唯心史觀——「光明日報」一九六六・四・一三。史紹賓「胡適與吳晗」——「人民日報」一九六六・四・一三。

④⑪ 王正萍・丁偉志「請看吳晗同志解放前的政治面目」——「光明日報」一九六六・四・一八。

④⑫ 光明日報編輯部「四十年代吳晗反共反人民反革命活動年表」——「光明日報」一九六六・五・六。

④⑬ 解放軍報社論「千萬不要忘记階級鬥爭」——「解放軍報」一九六六・五・四。「光明日報」五・四。「紅旗」六六年第七期。「文藝報」第六期。「北京周報」五月七日號。「人民中國」六月號。

④⑭ 人民日報社論「橫掃一切牛鬼蛇神」——「人民日報」一九六六・六・一。「光明日報」六・二。「北京周報」六月七日號。「人民中國」六月號。

（京都大學 松村 昂）